

千歳原 - 第6回日本ジャンボリー

守 屋 憲 治

千歳市史編集委員会専門部長

日本ジャンボリー（ジャンボリー）とはボーイスカウト運動に集う青少年と一部外国スカウトが参加、野外生活を通じ人種の色と地の境を克服し、国際親善と相互理解を深めることを目的とするボーイスカウト日本連盟（日連）最大の行事となっている。ジャンボリーは四年ごとに開催される全国大会で、昭和三十一年に長野県軽井沢地蔵ヶ原で第一回が、近時では平成二十五年に山口県山口市きらら浜において第一六回が開催されている。なお、ジャンボリーとは大規模な集会、大会の意である。

第六回となるこのジャンボリーが昭和四十九年八月、大自然をテーマに陸上自衛隊東千歳駐屯地に隣接する北海道大演習場東千歳地区において開催された。会場は千歳原と名付けられ、今も駐屯地の若い隊員は大会開催のことは知らなくとも小山然となつて残るアリーナ（野外大集会場）跡の高台を『演習場図』の地点名から「ジャンボリー台」と呼んでいる。

ジャンボリーは今日に至る迄、昭和四十七年二月開催の札幌オリンピック冬季大会滑降競技とともに千歳で開催された最大のイベントである。

北海道開催までの道のり

北海道にジャンボリーを誘致したのは、青少年の健全育成に強い関心を示していた町村金吾（S 34～46道知事三期在任）と堂垣内尚弘（S 46～58道知事三期在任）だという。堂垣内が知事一期目から二期目にかけての時（S 46～53）に町村（参議院議員）は日本ボーイスカウト北海道連盟（道

連）長の職にあり、堂垣内が知事三期目の時には名誉連盟長に就いている。さらに、町村が名誉連盟長を辞した昭和五十八年には堂垣内が一年間名誉連盟長を引き継いだ。二人の知事は北海道の大自然のなかで交歓と友情を深めるボーイスカウト活動に非常に熱心だったと今も語り草になっていて、道連事務局の壁には堂垣内が被ったカーキ色のつばの広いスカウトハットが掛けられている（堀達也、高橋はるみ両知事も道連盟長に就任）。

町村は昭和二十七年十月に改進黨公認で旧北海道一区（石狩・後志管内）から第二五回衆議院議員総選挙に立候補し当選、二十九年には日本民主党の結成に参加せず無所属となったのちに自由党に入党した。その後、三十四年四月執行の第四回道知事選挙に立候補、日本社会党の新人で日教組副委員長・北教組委員長だった横路節雄を破り当選した。

町村が北海道にジャンボリーを誘致したいと考えたのは、道知事二期目に就いたばかりの昭和三十八、九年頃であったという。道連事務局に対して内々にジャンボリー開催の最低条件についての研究を打診した。町村の目的は北海道の青少年活動とボーイスカウト活動の活発化が狙いであった。ジャンボリー開催の基本的条件は参加スカウトの輸送が最大の要件となる。国鉄をはじめとする輸送機関に問い合わせたところ、全国から総勢数万人が参加する北辺のジャンボリーに対応する瞬間輸送力構築は非常に難しいとのことから誘致は断念することとなった（ジャンボリー史で本州以外の開催は千歳と大分県久住高原のみ）。

当時の交通事情を見ると、国鉄は昭和三十五年に初の特急形気動車キハ80系を開発、上野・青森間蒸気機関車牽引の客車特急「はつかり」をキハに置き換え、翌年には道内でも特急「おおぞら」が運用を始めた。しかし、運転本数は少なく東京以北の長距離は客車急行が主で輸送力に難が

あつた。

また、千歳空港への旅客機飛来数は一日一八便程度であり、機材もようやく日本航空コンベアCV880、全日本空輸ボーイング727・100が就航しジェット化になりつつある時代で、提供座席数も限られたプロペラの日航ダグラスDC-6B、全日空ビッカース・バイカウト828が活躍していた。昭和三十八年には苫小牧港が開港したが、東京晴海・苫小牧間において旅客の大量輸送を可能にする日本沿海フェリーしれとこ丸の就航は四十八年まで待たねばならなかった。

町村は昭和四十六年四月に道知事を辞し、六月の第九回参議院議員通常選挙に立候補し当選した。道知事には堂垣内が就いた。道連にあつては連盟長に町村が就任、四十五年に朝霧高原で第五回ジャンボリーを開催した静岡県連がスカウト数をこれまでの三倍増を達成したことを知った。道内においても一人でも多くの青少年がスカウト運動に参加してほしいと願っていた町村は、四十六年末に四十九年第六回ジャンボリーを北海道で開催したいが困難な点があるかと事務局に質した。

道連事務局長は、役員、指導者に意向を打診するとともに輸送体制、財政見積りなどについて研究を重ねるとともに先進開催地の意見を訊き、北海道と北海道教育委員会に対しても指導を仰いだ。結果、関係者の熱烈な支持を得て、昭和四十七年度道連年次総会において第六回ジャンボリーを北海道に招致することとなった。五月十九日、長野市で開催された日連中央理事会において正式にジャンボリー招聘の意思表示を行い、各都府県連理事の全会一致で北海道開催が承認された。引き続き開催された年次総会においても承認され、北海道における第六回ジャンボリーの開催準備に取り掛かることになった。

北海道は昭和四十三年に開道百年を迎え、第二世紀への新たな一歩を踏

み出したばかりであつた。若々しい北海道の大地で多くの青少年が大自然をテーマに集いキャンプを通して先人の開拓者精神などを学び取ることは、血となり肉となって将来有為ある日本国民となることが期待された。

開催地の選定

ジャンボリー開催の第一段階として開催地を決めなければならない。

広大な北海道とはいえ一カ所に数万人を収容でき、野営を行いつつ大自然に接し国際親善と善隣友好を実践でき得るという条件を満たさなければならなかった。さらに、陸自の支援も念頭に置かなければならない。全国からスカウトが集まることを考えると輸送の便がよく、札幌に比較的近くなければならなかった。「札幌に比較的近く」…これは各都府県連から北海道に行くのなら72札幌冬季オリンピックの施設を視察したいとの希望が多いことが理由だった。さらに、財政的な面からは多くの施設費を投下しないで済むところ、自然破壊を極力避けること、原状回復が容易であることという条件も付いた。

昭和四十七年七月二日、日連は道内候補地を現地調査の結果、千歳を適地として防衛庁に対して北海道大演習場東千歳地区の使用申請をなした。

ジャンボリー会場として物色した地を『第六回日本ジャンボリー大会報告書（『大会報告書』）』に見出すことはできないが、新聞には次の地名が記事となっている。

「候補に恵庭、札幌（月寒）、千歳があがったが、結局、千歳に白羽の矢がたった」（『千歳民報』S47・7・21）

「千歳のほか札幌市西岡など二、三カ所が候補地にあがっている」（『北海道新聞』S47・7・25）

「北海道での会場を決定するときにも洞爺少年自然の家や札幌市の滝野青少

長、事務局次長が、ジャンボリーへの支援要請のため千歳市を表敬訪問、米田市長、半田教育長が応対した。日連一行は午後から現地を視察した。

ジャンボリー実行委員会事務局は昭和四十七年十一月に道庁、道教委に至近な北海道自治会館内（現・ホテルポールスター札幌）に設けられ、十二月十四日には第六回ジャンボリー実行委員会第一回総会が開催され本格的準備に入った。地元からは米田市長、鈴木助雄市議会議長、半田教育長、佐藤社教課長、高塚千歳第一団団委員長の五人が実行委員に選ばれた。当初の事務局体制は局長と事務の二人体制だったが、翌春には道職員五人の派遣と臨時職員の採用で二人の事務局体制となった。また、実行委員会が準備のため専門的立場からアドバイスを行う専門部会には、知事部局と道教委から総勢二七人の職員が任命され積極的な援助協力が行われた。

千歳原の前身

千歳原となる東千歳弾薬支処跡地の広路と弧を描くように延びる道路について述べたい。この長大な広路は戦時中の滑走路であり、曲線の道路は滑走路周辺にあった誘導路であった。誘導路の脇には空襲の際に航空機を爆風・爆弾片から守る土堤の無蓋掩体壕が築造されていた。

千歳には海軍の航空基地が三カ所があり、千歳原は海軍千歳第三航空基地（第三基地）と呼ばれていた。昭和二十年の基地について少し触れたい。

第一基地は現在の空自千歳基地・飛行場（旧・千歳空港）で、一一〇〇〇坪のコンクリート舗装滑走路が二本、第十二航空艦隊司令部、北東航空隊（空）、第四十一海軍航空廠などの施設群があった。第二基地は四発の大形陸上攻撃機が発進できる当時国内最長の二五〇〇〇坪のコンクリート舗装第二滑走路が建設中で、使用機種「連山」から連山滑走路と今も呼ばれている。滑走路延伸二期工事（800坪↓二期1300坪↓二期2500

坪）が完成したのは終戦の詔勅が発せられた日の夕刻だった。

第三基地の前身は、昭和十八年八月から九月にかけ東京商科大学（現・一橋大学）の学生三五〇人からなる北遣隊が建設した長さ一〇〇〇坪、幅四〇坪の第二滑走路の平行誘導路的なもので南北道路と呼ばれた。十九年に延長一一〇〇坪、幅八〇坪の簡易コンクリート舗装の第三滑走路となった。二十年には九州陸上哨戒機「東海」による901空が配備され対潜哨戒を行っていたほか、マリアナ強襲剣作戦の一式陸攻と陸軍空挺部隊が出撃を待っていた。

朝鮮戦争による米オクラホマ州兵師団の千歳第二地区駐留によって第三基地全体と第二基地の一部である第二滑走路東側は弾薬庫となり、総延長一〇〇坪にも及ぶ幅広外周道路で囲まれた。第一騎兵師団の撤退（S29・10）に伴い陸自が弾薬の供与を受け昭和三十年二月に東千歳弾薬支処として発足、有刺鉄線、赤外線警報機、警備犬、監視塔、動哨によって警備されていた。三十三年の白老弾薬支処新設に伴う移積後（S35頃）、203ミ榴弾から小銃弾、手榴弾、地雷と全ての弾種五万トが掩体壕内のプレハブに保管されていた（参考・橋本良）。弾薬支処は書類上、四十八年八月まで存続したという。

千歳原は弾薬支処跡は平坦で、火山灰地のため水はけが良く下草は少なかった。跡地の六〇坪が雑木林で、野イチゴやススキが目につく程度だった。戦時中と異なるのは弾薬庫を二分するように第二、第三滑走路の中央部を横断するC道と、第二滑走路ターニングパッド（幅広転換場）から東に延びるB道が整備された程度である。C道は安平道経由で安平駐屯地・安平弾薬支処に通じる（見返し写真参照）。

ジャンボリー開催時には、第三滑走路はジャンボリー大通り、誘導路にはこれまでの開催地に因み、かるいざわ通り、あいばの通り、ごてんば通

り、にほんばら通り、C道も第三滑走路を挟んで西側・駐屯地寄りはこちら、せばら通り、東側はあさぎり通りと名付けられた。

開催地への要請事項・支援

昭和四十八年三月、千歳におけるジャンボリー受け入れ態勢を準備するため日連事務局次長と実行委事務局次長が来千し、郵便局、北海道電力などに協力を要請した。要請内容は次のとおりであった。

胆振千歳郵便局・移動郵便局の設置と記念スタンプの作成、北電千歳営業所・安定電力の供給と非常用電源車の配置、千歳駅・案内所の設置、北海道中央バス・会場内循環バスの運行、千歳電報電話局・一般・公衆電話の設置、陸自・米軍・水道管敷設協力と多岐にわたっていた。

ジャンボリー開催まであと一年となった八月三日、町村道連盟長、日連事務局次長、道教委社教課長などが千歳市を訪れ東峯助役、鈴木市議会議長と面会した。来訪の目的は一年後に迫ったジャンボリー開催に伴う地元支援を実行委員会会長（日連総裁石坂泰三）名の文書「第6回日本ジャンボリー開催に伴う協力要請について」で正式に要請するものだった。

文書には「地元である貴市に是非ご協力をお願いしたい」と一九項目にわたって宿泊、交通、行事支援、施設整備の協力依頼が記され、回答期限は九月二十日と時間は短いものだった。

千歳市は要請項目の多さと市の立場では解決し得ない諸課題があることから困惑し、日常の公務に支障が出ないか苦慮した。岩瀬正人総務部長は新聞記者からの質問に「できないものはできないと回答する」と応じた。

協力要請事項（引用者要約）

- 1 見学者宿泊用学校施設の開放
- 2 旅館斡旋・一泊二食付高校生以下二千円以内、大人三千円以内

3 空港・駅・会場間臨時バス路線開設方協力依頼

4 道警への交通規制要請、交通整理体制樹立

5 アリーナショーへの出演（郷土芸能、フォークダンス要員・女子生徒）

6 市営プールの使用許可

7 自主参加行事に対する地元団体の協力調整

8 地元歓迎行事の協力

9 歓迎アーチの設置

10 一部市道の防塵処理

11 地元業者による食堂、売店開設の仲介

12 市展示館の設置

13 空港・駅・湯茶接待所の設営

14 運営本部要員に対する給食の仲介

15 千歳市対策本部の設置

16 資材、物品等の地元調達

17 施設工事設計施行に対する指導助言等

18 皇太子行啓の体制づくり

19 医療（病院、保健所）衛生（塵芥収集）への協力

日連はこれまで五回のジャンボリー開催経験があるといっても、地元対策については現地任せで大会運営がうまくいくか危惧する声が上がった。

千歳市は多項目にわたる要請項目に対して困惑したが八月二十二日には、「第6回日本ジャンボリー受入対策本部設置要綱」を定め助役を本部長に、総務部、歓迎行事部、交通調整部、物資供給部、環境衛生部、建設部の専門部を設けた。事務局は市教委社会教育課に置いた。ひと月後、専門部に係長職からなる主査（例・交通安全係長↓交通調整主査）が配属され受け入れ態勢が強化されたが、すでに要請事項の回答期限は過ぎていた。

当時の千歳の人口は約五万九〇〇〇人（現在95000）だった。この小都市に三万人弱のボイスカウトと期間中一〇万人の参観者があると予想された。一番の心配は⑯副食品の確保（野菜53t、果物14t、食パン・ラーメン各9.6t、豚肉2.6t、卵12万個、牛乳12万本など）で、一時期に大量の野菜、精肉が必要とされ一般市況に悪影響が出るのではないかと懸念された。また、⑳旅館は現在のように都市ホテル、ビジネスホテルがなく、小規模で宿泊数も小さいため周辺市町を含めどのように対応するかが課題とされた。また、一般参加者数についても未確定だった（朝霧高原大会・三万のボイスカウトに対して見物客は二七万人に及んだ）。

⑪一般売店一〇店舗と軽食四店舗も、当初は応募者が集まらなかった。協賛金五〇万円の支出を別にしても市内の零細商店では店員の確保と仕入れ・販売予想がたないことから出店の意思表示をできないことが原因だった。一四店舗の枠が埋まったのは十一月の中旬になってからだった。協力要請事項に対する千歳市の回答は昭和四十九年四月にずれ込んだ。

回答書

- 対1 小学校七校、中学校二校の体育館開放、給食、寝具は日連対応
- 対2 千歳市街地六〇〇人対応、予納金一〇〇〇円
- 対3 地元バス会社に要請
- 対4 道警に協力、交通指導員配置（10人×8日間（ $\frac{7}{31} \sim \frac{8}{7}$ ）張付）
- 対5 協力するが地元特殊事情により婦人マスメームは辞退する（フォークダンス要員、千歳地区労の申し入れと前回の反省から中止）
- 対6 （市営、小学校2プールへの会場移動バス経費の節約から中止）
- 対7 でき得る限り協力
- 対8 でき得る限り協力
- 対9 でき得る限り協力

対10 必要な整備を実施

対11 でき得る限り協力

対12 予算等の関係上、市単独で設置の意思はない

対13 接待奉仕員（10人×8日間張付）

対14 |

対15 現地対策本部（10人×8日間張付）

対16 市民の日常生活物資に値上がり、品不足等の影響をきたさない範囲で協力

対17 協力する

対18 |

対19 会場と市街地が近接していることから直ちに出勤できる態勢をもって協力する

その他 台風、集中豪雨等の対処については、防災計画に基づいて積極的に協力、避難場所として学校を開放する

人的面の協力について 前回5NJ（引用者註[5]NipponJamboree）開催時のごとく、富士宮市街地より約40kmもの遠隔会場で実施したのとは異なり、今回の6NJ会場は市街地より車でわずか10数分の近接地で、しかも陸上自衛隊第7師団用地内にあるので、市民の日常生活や、役所や各機関の平常業務に支障をきたさないようにするため、地元関係者の現地張付は必要最小限に止め、緊急、その他必要に応じ直ちに出勤し得る態勢をもって協力いたします。

『大会報告書』は「関係機関の協力・千歳市の支援」の項を設け次のように総括している。

要請を受けた千歳市は48年8月22日「日本ジャンボリー受入対策本部設置要綱」を定め、助役を本部長に部長、主査を発令し、受入対策本部を発足させ、受け入れ準備にとりかかった。9月1日地元関係機関と受入準備連絡会議を開催するとともに以後6回にわたり本部会議を開いた。この間に6NJ専門部会

にも出席しジャンボリーの実施要領を理解するとともに、保健所、警察、商工会等関係機関との連絡調整に協力いただき、6NJ成功の一助となった。

諸会議を通じて開催の具体的計画が逐次明らかになった49年4月3日市長名をもって、協力体制についての回答があった。回答の中で協力人員を明確にしているが、これは表面上の数であり、実際には大会以前又は期間中、一般市民を含め多数の協力があり、大会運営に多大の貢献を果たした。

ジャンボリー

ジャンボリー開催の一年前、道連は昭和四十八年八月三日から五日までの二泊三日でプレジャンボリーである県連単位のキャンプ大会であるジャンボリーを道内二カ所で開催した。

会場の一つは本番と同じ千歳原で設営や運営、行事進行の研究が目的で道央地区のボーイスカウト五〇〇人が参加、東千歳第十一普通科連隊が全面的に支援した。千歳原から遠い道北・北見市北光ではキャンプ地を屯田平と名付け、七〇〇人参加の北網地区大会が開催されジャンボリー開催のための資料の蒐集に努めた。

ジャンボリーの正式名は第一二回ボーイスカウト北海道大会といった。

アリーナの建設

ジャンボリーのメイン会場となるアリーナは第三滑走路北端西側に、正面を滑走路Ⅱ「ジャンボリー大通り」に向け築造された。二万七〇〇〇人のスカウトと二万人以上の観客を収容するアリーナは巨大なものだった。

アリーナは半径二二〇呎の半円状で、中心に半径三〇呎のステージ、正面には国旗掲揚台、ステージを囲むように一〇呎のパレードゾーンが設けられ、通路五本が放射状に外縁に向かって延びていた。中央通路の最深部

にはロイヤルボックスとフラワーゾーンが設けられた。アリーナは奥に向かって緩やかな挿鉢状で末端の高さは五呎となっていた。

パレードゾーンに面した中央通路両側には音楽隊席と合唱団席、その奥に特別席と記者、カメラマンの報道席があった。さらに、これらを取り囲むようにスカウト席、外縁部が一般席となっていた。

アリーナの建設は昭和四十八年八月末から準備作業に取り掛かり、十月から二カ月をかけ基本的な形が造りあげられた。作業は第七師団第七施設大隊が担当、器材としてブルドーザー、バケットローダー、グレーダー、ダンプトラックを駆使、延べ三〇〇〇人の隊員が従事した。

アリーナを挿鉢状にするための土砂は、第三滑走路周辺に点在した無蓋掩体壕の土堤を崩し運び込んだ。当時、掩体は連山滑走路以東に七〇基以上が存在し、掩体がなくなった所はジャンボリー時に野営地とされた。

ロイヤルボックスの床板張り、国旗掲揚塔設置、ステージ内かがり火火床のコンクリート打設、階段と木柵の設置、外縁部の芝張りなどは昭和四十九年春の雪解けを待ち、七月に向け順次行われた。

アリーナ前の滑走路は、誘導路取付部分・ターニングパッドと隣接のシオルダー（路肩）部分を加え「中央広場」と呼ばれ、技能を競うスキル・オ・ラマやゲーム、スポーツなどに使われた。ジャンボリー開催にあたって第三基地は誘導路、掩体壕を含め余すところなく活用された。

ジャンボリー開催反対運動

ジャンボリー開催が決まった昭和四十八年前後、全国的に反戦・反安保の風が吹き荒れていた。当時の反戦・反安保の流れとジャンボリー基地内開催反対の引き金となった長沼ナイキ事件を概観してみたい。

反戦運動 昭和三十九年八月、北ベトナム魚雷艇が米駆逐艦を攻撃（ト

ンキン湾事件)、これを受け翌年二月から米国はボーイングB-52爆撃機ストラトフォートレスによる北爆を開始しベトナム戦争に介入した。四十二年十月には全国で10・21国際反戦デーが催され札幌でも全道中央集會が開かれた(東京新宿・騒乱罪適用)。四十五(一九七〇)年六月に政府は日米安保条約の自動延長を発表、全国で反安保の集會が開催され学生運動もピークに達した。四十八年一月に米国・南ベトナム・北ベトナム・南ベトナム臨時革命政府がパリでベトナム和平協定と議定書に調印し米軍がベトナムから撤退する渦中、中国は南ベトナムのパラセル(西沙)諸島に侵攻し島嶼を占領した(S50・4サイゴン陥落)。

反戦とは戦争に反対するもので軍事組織に対するものではないが、この当時の国内では憲法の解釈・非武装平和主義から抑止力である自衛隊の存在を良しとしない勢力も固まりとして存在し、北海道は全国的にみても革新色が強かった(S49参院選挙道地区全4議席革新(共社公)独占)。
『毎日グラフ』は自衛隊を「増刊号 日本の戦力」(S45)で次のように表現していた。当時のマスコミの一般的な意見である。

一九七〇年一〇月は 日本の防衛問題にとって 忘れることのできない時となった それは初の『防衛白書』と「四次防」の大綱が発表されたからである
すでに自衛隊は 余りにも大きすぎるといわれていたが この二つの発表はその恐れを裏付けた それは自衛隊がさらに巨大なものに発展していく指標である(略) われわれは 自衛隊がかつての帝国軍隊のように日本を誤らせな
いために監視をしなければならない(「ベールを脱いだ巨大な軍事力」)

長沼ナイキ事件 長沼ナイキ事件とは昭和三十七年の恵庭事件(酪農家野崎兄弟射撃訓練用通信線切断↓無罪)に引き続き、自衛隊の合憲性が問われた事件である。

昭和四十三年五月、防衛庁は第三次防衛力整備計画(S42~46)におい

て空自千歳基地に地对空誘導弾ナイキ・J(ナイキ・ハーキュリーズ)を装備する第三高射群を新編、高射隊分屯基地を長沼町馬追山まおいに新設する計画を発表した。馬追山地区は水源涵養保安林に指定されていたが、翌年七月に農林大臣は基地建設のため森林法に基づく保安林の指定を解除した。これに対して一部地域住民は「基地建設に公益性なく、保安林解除は違法」として処分の取り消しを求めた行政訴訟を札幌地方裁判所に起こした。

昭和四十五年六月に千歳基地で第三高射群新編が完結、四十六年十二月には分屯基地隊舎が完成し第十一高射隊二〇〇人が馬追台に移駐、ランチャー、レーダーを設置し四十七年十二月には誘導弾が搬入された。

昭和四十八年九月七日、札幌地裁は「自衛隊は憲法第九条が禁ずる陸海空軍に該当し違憲であり、森林法の解除を取り消す」とした(S51札幌高裁・原告請求棄却・統治行為論、S57最高裁・上告棄却)

反基地闘争とジャンボリー 自衛隊は違憲という長沼ナイキ事件の判決が出た昭和四十八年九月は、千歳市が日本ジャンボリー受入対策本部設置要綱を定め本格的に受け入れ準備を始めようとした矢先のことだった。札幌地裁において自衛隊違憲の判決が出ても千歳の街は冷静だった。地元紙『千歳民報』では第一審判決ということもあって大きく報道されることはなかった。判決が出た直後の十八日、裁判の舞台となった長沼分屯基地を千歳航空協会が見学、ナイキに関する多くの質問が隊員に向けられた。

十一月十一日、反基地闘争を展開している千歳地区労働組合協議会(地区労)は、第一九回定期大会においてジャンボリー支援をボイコットする方針を決めた。また、千歳基地にロッキードF-104J戦闘機スタンプファイターの更新として配備が予定されるマグダネル・ダグラスF-4EJ戦闘機ファントムIIが騒音をまき散らすと配備阻止を闘争方針とした。



写真2 ジャンボリーボイコットを報じる新聞(『北海道新聞』『千歳民報』)

ジャンボリー反対は傘下の地区労働組合が違憲判決の出た自衛隊演習場内で自衛隊員とともにジャンボリーを支援することは、ポーンスカウトと支援に参加する組合員・生徒などへ社会教育に名を借りた軍事思想普及につながることを最大の理由とした。

地区労にはジャンボリーの支援要員となる自治労(市職)、全通(郵便)、全電通(電信電話)、

国労(国鉄)、北教組など総評系社会党系の二四単産、組合員一四〇〇人で組織されていた。ボイコットが行われた場合はジャンボリー運営への影響は必至だった。

ジャンボリーボイコットは十二月に入って地区労で機関決定された。

昭和四十九年三月に入ると地区労では市議会に反対請願に添付する署名運動を展開した。五月十五日、地区労は市議会議長に対して請願書「第六回日本ジャンボリー千歳原開催の千歳市受入れを阻止して下さい」を二二四六人の署名を付け提出した。署名の目標は三〇〇〇であったが市民の関心は薄かった。さらに、二十五日には千歳市ジャンボリー受入対策本部に対しても請願と同様の申し入れを文書で行った。

請願の骨子を地区労最大の単組である千歳市職員労働組合第18回定期大会資料にみると四本の柱から構成されていた(一)内「請願書」(抜粋)。

1 11歳から18歳までの青少年の健全育成集団と自認している団体が違憲判決が出された直後に、国民世論を二分して闘われている基地内を選んで実施す

ることは混乱を生ずるから中止すべきである。(会場や支援体制の主たる内容は、自衛隊が当たる。このことは平和に逆行し純真無垢の年少者に、軍事思想を植付ける恐れが非常につよく、再軍備促進の重大な要因をなし、平和憲法の改悪につながる)

2 千歳市の人口に匹敵する集団が入ることによって一時的にせよ経済的な混乱が予想される。

3 自治労をはじめ市内の労働者はこの行事のために相当の時間をさかれ、市民サービスの低下が随所に起こることが予想される。

4 全体として市政の推進に伴う市民の利益という視点から見てもほとんどメリットはない。

また、同じ日に全道労協の反基地反自衛隊単産連絡会議が開催され、日連とともに主催者である北海道に対してジャンボリー基地内開催中止の申し入れ、千歳市内で五月二十六日に反対集会を開くことを決めた。

反対運動に対するジャンボリー実行委員会の様子を五月二十日付『毎日新聞』は「週刊座標」で次のように伝えている。

とまどうジャンボリー「軍事思想を普及」全道労協が反対運動

(略)道職員を中心にしたジャンボリー実行委員会では、当初予想もしなかった強い反対運動に「本当にまいりました」と困り切った表情。

(略)第一―第四回までいづれも自衛隊基地内で実施した。しかも、地元、市町の協力はもちろんのこと、自衛隊員の大々的支援を受けたのにもかかわらず、なに一つの反対運動は起こらなかった。だから、北海道の会場を決定する時、自衛隊基地内に決まったのもごく自然のことだった。

二十六日に開催された全道労協のジャンボリー千歳原開催反対全道集会は、主催者が目標とした参加者二〇〇〇人には遠く及ばない一〇〇〇人で行われた。集会ではファントム配備阻止を決議、デモ行進がグリーンベル

トから千歳基地に向かつて行われた。集会参加者数からも反対運動は今一つ盛り上がりにかけていた（ファントム千歳初号機配備S49・6・15）。

地区労の反対請願、全道労協の反対集会ともにジャンボリーの開催が迫ったからの行動であり具体的な成果を上げるには無理があった。当初から反対することに意義を見出すようなアリバイ的反基地闘争とみられていた。

ジャンボリー開催を半月後に控えた七月十五日から市議会総務文教常任委員会で請願の審査が始まり、十九日には市から地区労に対して「運営方法から軍事思想普及の懸念はないが、危惧があるのであれば再度主催者側に留意方を申し入れる」との文書回答がなされた。請願は二十二日、二十三日と審査され、市と地区労は覚書を結ぶことで合意した。そして、翌日の全道労協と北海道との協議を経て、二十五日には市と地区労は覚書に署名した。合意の内容は、「すでにジャンボリー会場の変更は難しいが、開催にあたり軍事思想普及の排除を重ねて主催者側に申し入れるほか、請願の趣旨が十分に生かされるよう最大限の努力をする」というものだった。

ジャンボリー参加第一陣千歳入りまで残り五日という段階で地区労はジャンボリー受入阻止の請願を取り下げ、市内に掲げられていた「ジャンボリー阻止」の看板を撤去、反対運動にピリオドが打たれた。

ジャンボリー史上初の革新団体の反対運動について米田市長は『大会報告書』「こあいさつ」のなかで次のようにわびた。

（略）革新団体等からの抵抗もあって、関係者はじめ折角参加申込をされた全国ボーイスカウト諸君には不愉快な思いをされたのではないかと思います。

（略）色々御心配をおかけした点につき6万市民に代り、心からお詫び申上げたいと思います。

ジャンボリー輸送交通路

二万七〇〇〇人のジャンボリー参加者と一〇万に達すると考えられた見学者の輸送ルート問題が顕在化したのは開催年である昭和四十九年になってからだ。ジャンボリー参加者は日程から鉄路、空路、海路の三ルートで七月三十日から開会式午前中にまでに千歳原入り、閉会式六日の午後から翌七日中に撤収することが明らかだった。駅などから会場までの輸送機関は貸切バス以外になく、台数も参加者だけで五〇〇台前後が予想された。

このジャンボリー輸送の最大の障害は昭和五十年から中央大通と呼ばれる第2停車場線の千歳川に架かる第二千歳橋の架替工事だった。二十九年に永久橋となつた第二千歳橋は四十八年に全線が開通したことに伴い交通量が増加、五十年を目指し架替工事のため通行ができなかった（全線舗装ⅡS52、H6（道道））。これによって千歳原から最も多くジャンボリー輸送に供される国鉄千歳駅間の輸送障害となることが予想された。さらに、国道36号の本町と朝日町八丁目間の拡幅工事も着工されていた。

当時、郊外市道の多くは未舗装二車線の状態であった。受入対策本部交通部会は交通混雑防止の観点から一方通行Ⅱ環状ルートを検討した。

千歳駅・錦町十字街・国道36号（現・南千歳駅前）・道道早来千歳線
・旧・早来千歳線・東千歳駐屯地裏門（裏門Ⅱ現・技本札幌試験場入口）
・旧・板敷誘導路・弾薬庫外周道路・C道・【ジャンボリーゲートⅡ着発地】・連山滑走路南側（S20延伸部分）・旧・板敷誘導路・裏門・第2平和道路・旧・早来千歳線・日の出大通・東11線・第2停車場線・千歳駅
（苦小牧方面からは苦小牧港・道道上厚真苦小牧線・国道234号・道道早来千歳線を通行）

四月二十五日、交通部会のほか千歳警察署、北海道中央バス、千歳バス（現・千歳相互観光バス）、日本通運などの関係者が合同で現地調査を

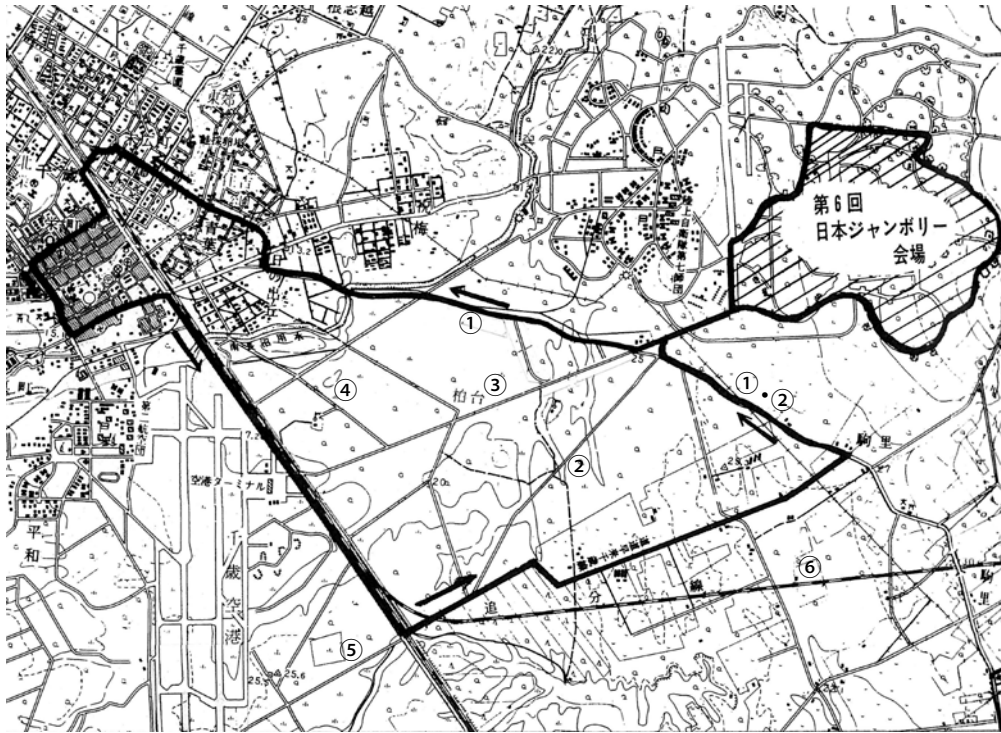


図1 千歳原周辺道路図(『広報ちとせ』昭和49年7月10日号掲載図一部修正)

→=千歳駅→千歳原→千歳駅一方通行順路

①旧・道道早来千歳線 ②平和道路 ③第2平和道路(板敷誘導路、米軍柏台通り) ④米軍クマステーション専用道路 ⑤B経路 ⑥追分線=建設線名→S56石勝線

行った。合同調査の結果、進入路の国道から道道への進入が難しい、退出路では日の出丘(現・日の出五丁目)周辺の道路幅が狭いこと、日の出大通北端のY字線形の進路が間違えやすいという問題点が出た。

六月下旬になって退出路(バックロード)となっている旧・板敷誘導路Ⅱ第2平和道路の一部が、民有地であることが売買の仲介に入った不動産業者の訴えで判った。不動産業者はジャンボリー輸送交通路として使用するのであれば補償を要求すると迫った。

千歳市(受入対策本部)はバックロード上に民有地があることを認識しておらず困惑、七月五日になってバックロードは第2平和道路経由を止めてすぐに旧・早来千歳線に入ることとし、ようやく輸送交通ルートが決まった。ジャンボリー開催まで一カ月を切っていた。

進入、退出一方通行の実を上げるため旧・早来千歳線は千歳市によって、裏門・ジャンボリーゲート間と千歳原内の道路は第七施設大隊によって整備された。千歳原と周辺の砂塵対策には部隊散水車四両を充てた。

見学者の一般車両は入場制限され循環バスを利用した。停留所は千歳駅と旧・中央バス千歳ターミナル横に設けられた。運賃は一乗車一〇〇円、個人で入場するには協賛のワッペンを二〇〇円で購入する必要があった。

千歳原周辺の道路史を概説する(図1「千歳原周辺道路図」参照)。

第2平和道路 この道は戦時中、第一基地横滑走路東端と第二基地連山滑走路南端を結ぶ四三〇〇坪の戦闘機用板敷誘導路、物資運搬路として整備された。米軍は朝鮮戦争時から第二基地に多数のハットメントを建設し駐留を開始、柏台通り(千歳第二地区専用自動車道)として使用し、昭和四十二年に一部を石勝線建設のため踏切を横断しない千歳クマステーション専用道路(現・南2号道路)に切り替え青葉丘に抜けた。後に第2平和道路となったが五十一年に廃道となり、現在は通行できない。

昭和三十七年以前は、平和道路とともに裏門から飛行場南側・烏柵舞橋・鱒化場道路を通過して演習場に向かう戦車道路・B経路の一部だった。

旧・道道177号早来千歳線 この道の始まりは早来フモンケ(富岡)・

千歳アウサリ(駒里)・千歳(川船船着場Ⅱ金谷湾洞)を結ぶルートである。明治二十五年に北海道炭礦鉄道岩見沢・室蘭(現・東室蘭)間が開業、

二十七年に早来駅が開業した。その後、千歳から最も近い駅である早来と千歳を結び、千歳村民の汽車利用、アウサリにあった燐寸軸工場、タンニン工場の製品搬出のためのアウサリ道路として形成されていった。青葉丘から裏門付近までが海軍専用線(米軍擬線)と並行した(S19~20(S26~51))。

昭和二十五年からは早来運輸(早来バス(現・あつまバス))が美々經由から駒里經由に路線を変更、三十二年三月になって道道177号(早来村フモンケ→千歳町日の出丘)として路線認定された。現在は市道駒里柏台線(旧・平和道路(NJ進入路部分))・十東5号道路(NJ退出路部分)となっている。

道道258号早来千歳線 現・道道ルート(旧・美々第2道路)は昭和四十二年十月に旧ルートから変更路線認定された(終点Ⅱ美々)。

石勝線を跨ぐ平和道路跨線橋、千歳線平和通り高架橋梁(架道橋Ⅱ現・南千歳アンダーパス・美々駒里大通り橋梁)は石勝線路盤工事と千歳線複線化に伴って建設され、平和通り高架橋梁は千歳線上りと石勝線が交差する追分乗越橋梁(跨線線路橋)の延長にある。平和道路跨線橋は四十二年、平和通り高架橋梁は四十三年に完成、現在のルートが供用された。

昭和四十八年にジャンボリー輸送ルートを見込み、国道36号分岐点から駒里橋までの五・五^キが北海道によって舗装されている。

道道258号への改番は中央大通を北海道に移管し、早来千歳線に編入した平成六年十月のことである(終点Ⅱ上長都/国道・道道一部重複)。

国道から駒里方面四〇〇^リの四車線化は、沿線の美々ワールドにおいて千歳科学技術大学が開学し大手レンタカー会社が立地操業した十年から工事に着手し、セイコーエプソンが立地した十三年までに終了した。

陸自のジャンボリー支援

陸自のアーリーナ建設、道路整備については既述したが、そのほかに輸送、天幕、通信、入浴給水、救護、音楽、航空、警備、救急、本部業務など支援は多岐にわたった。大会開催時、支援のための隊員は連隊規模の八二〇人、車輛はジープ、ウエポンキャリア、ボンネット、給水車、散水車など一三〇両以上、観測ヘリコプターの川崎KH-4、ヒューズOH-6Jは記録撮影のため札幌駐屯地(丘珠)から連日飛来した。また、資器材として通信器材、入浴セット、天幕などが使用、貸与された。

陸自へのジャンボリー支援要請は昭和四十八年七月三十日に日連総裁から防衛庁長官に申請されるとともに現地部隊との調整に入った。十二月二十日には陸自北部方面総監とジャンボリー実行委員会会長との間に基本協定が、四十九年四月二十二日には第七師団長とジャンボリー実行委員会常任委員長との間に細部の協定が結ばれた。これら上部の協定を踏まえ、副師団長を長とする第七師団ジャンボリー協力準備本部長とジャンボリー実行委員会事務局長とでさらに細部を詰めていった。七月二十九日にはこれまでの協力準備本部を改編しジャンボリー支援団が編成された(解散8・9)。支援団員は旧式グレーの夏季作業衣を半袖に直し着用、ジープ等の支援車輛には七稜星の道旗と大会旗を前面に掲出し少しでも自衛隊色を薄めようとした。

目立たぬ存在で陰に陽にジャンボリー成功のため献身的な支援を行う自衛隊員に対してスカウトは感謝した。スカウトに自衛隊アレルギーはなく、部隊の協力があつたればこそジャンボリーが開催できたという気持ち

を持っていた。また、自衛隊員も出身県の野宮区で方言などからふるさとをかみしめたという。

皇太子殿下行啓

八月四日から六日までの三日間という長時間にわたって、ジャンボリーご臨席と千歳地方のご視察を兼ね皇太子殿下（殿下／今上陛下）が行啓された。殿下の来道は昭和四十七年二月の札幌冬季オリンピック以来で、地方の同一の地に三日間も滞在されることは稀有なことであった。

四日、羽田発の日航機で午前十一時三十五分、千歳に到着された殿下は空港で堂垣内知事、渡辺日連総長、町村道連盟長等の挨拶を受けられ、直ちに市営工場団地の視察に向かわれた。サントリー千歳プラント（H18売却十製造委託↓日本アスパラガス）と北海道松下電器（現・パナソニック）がご視察の栄に浴した。

サントリーでは社長の佐治敬三と志村工場長、次の視察先である北海道松下電器社長の国信太郎らが殿下を出迎えた。米田市長の工場団地概要説明のちPRケラー（貯蔵庫）で昼食をとられた。昼食後、山崎ディスプレイラリー（大阪府）で醸造された原酒を千歳の水でブレンドする工程をご覧になられた。

北海道松下電器ご視察の様子は昭和四十九年八月二十七日付社内報『北翔』によると次のとおりであった。

（略） 定刻午後二時三十分殿下のお召の車は玄関前にお着きになりました。道、市関係代表者ならびに地元開拓功労者、千才工業クラブ代表者、そして北海道松下電器の役員の方々のお出迎えに対し、ご懇情溢れる会釈をされながら、松下電器（株）松下社長のご先導で貴賓室へとすまれました。（休憩、挨拶
松下社長、会社設立の目的説明 国信社長、会社の歴史と現況、エレクトロ



写真3 北海道松下電器を視察される皇太子殿下
左から松本工場長、殿下、堂垣内知事、松下正治
松下電器社長（『北翔』転載）

セラミクス製品の説明 視察＝製品展示室、製造工程）当日は非常に暑く、工場内では珍しく汗がにじむような暑気でしたが、殿下におかれましては終始直立不動のご姿勢でご熱心に説明を聞かれておられ、失礼とは思いますが額の汗をお拭きになることも致さず、説明者として頭のさがる思いがいたしました。（略） 十五時五十分予定通りに工場ご視察の時間を終了し、（略）従業員代表二百五十名の男女の打ちふる日の丸の小旗の中をお車は静かに退場されました。（略）（内引用者要約）

御料車は昭和天皇、香淳皇后（昭和天皇ご夫妻）が、昭和三十六年五月第一二回全国植樹祭でアカエゾマツをお手植えになった支笏湖畔モラップに向かわれた。植樹祭では参加者一万人が昭和天皇ご夫妻とともに三万六〇〇〇本の苗木を植樹、一四年を経て三万五千ほどに生育していた。

殿下は御製「ひとく」とあかえそ松のなへうゑて みと里のもりになれ
といのり津」を刻んだ植樹祭
記念碑をご視察後、お手植え
のアカエゾマツについて道林
務部長と札幌営林局長の説明
を受けられた（昭和六十二年
九月、殿下は第一回全国育
樹祭でモラップを再訪し、美
智子妃殿下とともにお手植え
のアカエゾマツ下枝打ちのお
手入れを行った）。

午後五時過ぎ、殿下は皇族のお泊所となっていた支笏湖畔北

端にある王子製紙苫小牧工場の倶楽部別邸（支笏湖倶楽部）に到着された。

倶楽部別邸では社長の田中文雄が殿下を御座所へ案内、休憩の後、控室で道知事から道勢概要をお聴きになられた（八月五日の殿下の動静については、「千歳原ジャンボリー開催」の項で述べる）。

八月六日は午前九時に倶楽部別邸を発ち、蘭越の水産庁北海道さけ・ますふ化場千歳支場（現・水産総合研究センター北海道区水産研究所千歳さけます事業所）に向かわれた。五十嵐ふ化場長の説明で場内をご視察後、ふ化場研究職とさけ科魚類についてご懇談し、午前十一時前千歳空港に向かうため支場を発された。

殿下は千歳空港午前十一時四十分発の日航機に搭乗、午後一時十分羽田着、午後二時前に東宮御所に還啓された。

なお、殿下の行啓時、妃殿下には長野県戸隠で開催されたガールスカウトのアジア太平洋国際キャンプにご臨席、ご夫妻でスカウト運動に関心を寄せられた。

もりもと「ちとせ原」 「ちとせ原」はジャンボリー会場千歳原を記念して発売された千歳におけるただひとつの商品で、市内の和洋菓子店「もりもと（S24創業）」の洋菓子詰め合わせの名である。

ちとせ原の発売には殿下にまつわるエピソードがあった。

ちとせ原誕生の発端はもりもとが殿下の旅の疲れをお慰めしようと、「雪鶴」「アスパラのまち」「ドライケーキ」などの和洋菓子を千歳の味覚として献上したことに始まる。

ジャンボリー閉会直後から発売されたちとせ原の二つ折りの菓には次のように書かれていた。

第六回日本ジャンボリー行啓の折 賜 皇太子殿下御賞味の栄／お買い上げの栄 昭和四十九年八月六日 ちとせ銘菓「ちとせ原」

（略）もれ受賜しますと、皇太子さまには御自身で一つ一つお試食になり、さらにお土産にお買い上げの栄を賜りました。このお菓子は水を使わない乾燥菓子で、最高の原料と自慢の技術がもたらしたバラエティに富んだお菓子です。

ちとせ原発売の由来は殿下が賞味しお買い上げになったことにあった。もりもとによると「ちとせ原は当初、菓にあるとおりドライケーキの詰め合わせだったが、後に和洋菓子詰め合わせ商品の名となり平成十五年頃まで販売していた。雪鶴、アスパラのまちなどのロングセラー商品は、今も発売当初のレシピによって製造されている」という。

サントリーバードヤード サントリー千歳プラントでは殿下のご来訪を記念して昭和五十年から四年計画で、PRケラー周辺と国道寄りに勇舞川の語源となった池を復元するなど敷地の三分の一にあたる二万四五〇〇平方メートルに野鳥が好む実のなる木など一八種四〇〇〇本を植樹、野鳥が憩えるバードヤードを造成し一般に開放した。

これは昭和四十八年にサントリーがウイスキーづくりを始めて五〇年周年となることを記念した「愛鳥キャンペーン」のひとつで、造成は日本野鳥保護連盟の指導を受けた。千歳のバードヤードと同時期に白州ティスティラリー（山梨県）と宮島プラント（広島県）にバードサンクチュアリーが開園した（宮島H8閉園）。千歳での愛鳥キャンペーンは平成の初めまで続けられた。

千歳原ジャンボリー開催

（開会式から閉会式までの行事は紙数の限りから概説に止めたい）

ジャンボリーは「旗と炎の祭典」だったと筆者の周りの参加スカウトと見学者は異口同音に言う。

旗と炎の全体行事と千歳に関する記事を核に述べていきたい。

一日午後、開会式に先立ち大会長・日連総裁招待のレセプションが千歳



写真4 レセプションの風景
挨拶をする町村道連盟長 左端は堂垣内知事、
一人おいて米田市長

本が入場した。スカウト宣言は、道連派遣団北海道第二八隊所属千歳第一団の久保雅義によって行われた。最後に全員で「ジャンボリー集うジャンボリー千歳原・・・」と第6回日本ジャンボリーの歌を合唱、日の丸が降納された。この日の見学者は一万三〇〇〇人に及んだ。
三日目午後七時からは大営火に点火し幕を開けた。

公民館で開催され、日連、道連、道、道教委、市、市教委、陸自の関係者がジャンボリーの成功を誓い合った。この席上、挨拶に立った道連盟長・自治大臣の町村は「ジャンボリーの開催に地区労をはじめ革新団体が反対したのは不見識であり、不可解だ」と革新団体の反対運動を問題とした。
開会式は午後六時半、カーキ色の制服に身を包んだスカウト二万五〇〇〇人のジャンボリー大通り（第三滑走路）行進から始まった。陸自北部方面隊、第七師団、第一特科団の音楽隊から成る九六人のジャンボリー音楽隊が行進曲を吹奏するなか、日の丸一六〇〇本、外国派遣団国旗一二本がアリーナを埋め、大かがり火が燃やされた。
日の丸掲揚とともに君が代を吹奏、スカウトは日の丸に敬礼を続けた。ジャンボリー旗六四〇本がアリーナに入場し開会式典が始まった。最初スカウト宣言、総理大臣、来賓、総長などの挨拶に続き隊旗一八〇〇



写真5 ボーイスカウトを巡視する皇太子殿下
左端は町村道連盟長

昇するスポーツである。少年によるパラセール隊は昭和四十年に名古屋団に続いて千歳航空協会内に創設されたが中絶し、前年に千歳航空少年団として再建された。四十九年、パラセールを披露する千歳空港まつりはジャンボリーの開催、第二千歳橋の架替工事、国道36号拡幅工事による渋滞懸念のほか反基地闘争によって中止となり、少年団は活躍の場を失いジャンボリーでの展示に力が入って

営火長は野営長である道連盟長の町村が担った。文部大臣奥野誠亮の挨拶の後に全国各ブロックが地方色豊かな演技を、外国派遣団が民族舞踊などを披露し会場は大いに盛り上がった。（本論で記述のない時間帯は、観察旅行、友情ゲーム、自主参加行事、宗教行事に充てられた）。
四日目午後、中央広場で開催された「友情の広場」には「千歳アワー」が設定された。
千歳市町内会連絡協議会婦人部四〇人がそろいの浴衣姿で千歳音頭を披露すると多くのスカウトも踊りに加わり輪は次第に大きくなっていった。また、市職員橋本日出央が前年に結成した千歳北海太鼓も勇壮な響きを会場に轟かせた。

た(第1回空港まつりⅡ S 39 (基地開庁7周年記念行事:周年初回) 再開 S 57 (H 8 / 基地航空祭 S 53))。

展示では五人の少年が一〇〇日程の曳行索で五〇以上の大空に舞い上がるスリル満点の空中散歩に、会場に詰めかけたスカウトから喝采を浴びた。団員の大沼友一郎らは「大空 友好緑の大地」「祝 6 回日本ジャンボリー」などと書かれた大きな垂れ幕で大空からスカウトを歓迎した。

五日目は皇太子殿下のご視察があった。殿下は午前九時に倶楽部別邸を出発し十時に千歳原に到着、野営長の案内でスカウトを激励された。午後にはジャンボリー大集会となった。殿下からのお言葉を賜ったのち各都道府県連代表各一〇〇人によるパレード、全国各ブロックと外国派遣団の演技、そしてカラーパレードはジャンボリー旗、日の丸、隊旗などが次々と集団発進し四五〇〇本の旗がアリーナを埋め尽くし、支笏湖研修センターで開催されたスカウト会議の決意が発表された。

皇太子殿下お言葉

(略) このたびのジャンボリーのテーマは、「大自然」とのことです。

(略) このジャンボリー期間に、皆さんひとりひとりに、自然保護の心が芽生えるところに、ここで結んだ互いの心のつながりを、国際親善の大きな輪へと広げていくよう望んでやみません。

この日、午後七時近くからスカウトフェスティバル“名残りの営火”が催された。たいまつと大かがり火による炎の祭典だった。大かがり火には殿下が手ずから点火された。第6回日本ジャンボリーの歌などを全員で合唱、ブロック演技の後、ジャンボリー旗六四〇本に続き、一六〇〇本のたいまつ隊が入場、スカウト全員がローソクに火を灯した。殿下のご退出後、照明は徐々に落とされた。午後八時半頃、解散の放送とともにアリーナのすべての照明が点灯された。会場は興奮に包まれ帰営時間が延長され

るなか、全国ブロック、国籍にかかわらず長く長い間、互いに腕を組みあい別れを惜しんだと『大会報告書』にある。

最終日の六日は明け方から雨が降り出し次第に激しさを増した。午前十一時からの閉会式の始まるころ雨脚が強くなったが、隊旗の集団入場式が始まった。大雨のなか式典は肅々と進行し日の丸が君が代の吹奏とともに中央大ポールから降ろされた。最後に全スカウトによって活動のバックボーンである「おきて」の唱和と日連祝声「いよみが 弥栄」の三唱が行われた。蛍の光が流れるなか隊旗が集団退場し千歳原における第六回日本ジャンボリーは幕を閉じた。

6NJ都道府県別参加人員等

東京 2861 大阪 2312 北海道 2287 愛知 1448 静岡 1444
兵庫 1056 ほか 計 25447

・運営本部員 901 ・見学者総数 47875 総計 74223

6NJ道連派遣団北海道第二八隊所属千歳第一団員名簿

新井忠雄 内田秀樹 大場雅人 布谷清信 久保雅義 中島功雄 賀来政一郎
菊池祐志 増野 博 三田博之 油井伸宏 高部 亨 中島茂樹 宇佐美貴彰
松岡俊彦 今村徳秀 藤田 満 浦野健彦 白根雄一 高部 憲
本部要員・高塚興正 喜多英司 新宅龍二 田所龍一 上田安彦

6NJ外国派遣団人員

米 国 199 韓 国 155 インドネシア 14 比 国 9 南ベトナム 8 豪 州、イン
ド、シンガポール、香港各 7 マレーシア 6 パキスタン、バングラデシュ各 5
計 429

6NJ決算(単位・万円)

・収入 27436
 自己資金(参加費など) 19829 補助金7350(国4350 道3000)
 雑収入257
 ・支出 26640
 実行委員会費401 実委事務局費1400 施設整備費6737 大会運営費
 18101
 ・余剰金796
 道費補助金返還64 日連732(↓道連基金)

引用・参考文献

第6回日本ジャンボリー実行委員会『第6回日本ジャンボリー大会報告書(昭和49年)』昭和五十年／『第6回日本ジャンボリー(パンフレット)』昭和四十九年
 北海道『第6回日本ジャンボリー皇太子殿下行啓御日程次第書』昭和四十九年
 ボーイスカウト日本連盟『第6回日本ジャンボリー記念アルバム』昭和四十九年／「第6回日本ジャンボリーの歌」(『ボーイスカウト歌集』採録)
 日本ボーイスカウト北海道連盟(道連)『第6回日本ジャンボリー資料綴』昭和四十九年
 道連札幌地区30周年記念誌編集委員会『ボーイスカウト札幌地区三十年の歩み』道連札幌地区協議会 昭和五十四年
 道連歴史資料室運営委員会資料集編さん委員会『北海道におけるボーイスカウト運動のあゆみ』道連 昭和六十年
 千歳市立駒里小中学校70周年記念協賛会『記念誌駒里』昭和五十一年
 北海道新聞社『北海道大百科事典』昭和五十六年
 毎日新聞社『毎日グラフ』「増刊号日本の戦力」昭和四十五年
 自治労千歳市職員労働組合『第18回定期大会』昭和五十年
 橋本良「風雪人を磨く」海軍経理学校第36期のホームページ

新宅龍二スクラップブック「日本ジャンボリー」
 千歳市『増補千歳市史』昭和五十八年
 日本国有鉄道札幌工務局『札幌工務局七十年史』昭和五十二年
 『千歳民報』／『北海道新聞』／『読売新聞』／『朝日新聞』／『毎日新聞』

協力

公益財団法人ボーイスカウト日本連盟
 日本ボーイスカウト北海道連盟／千歳第一団
 陸上自衛隊第七師団東千歳史料館
 もりもと
 自治労千歳市職員労働組合
 連合北海道千歳地区連合
 喜多英司／新宅龍二／鈴木徹／原智浩／大島仁／橋爪耐三／遠藤潤一(北見第二団)



写真6 ジャンボリー台(撮影年不詳)
 手前からアリーナ跡の斜面 通路状の右方はステーション跡、左方の細長い小山は国旗掲揚台跡 その奥がジャンボリー大通りとなった第3滑走路